

十段物語



第2回

関西柔道界の礎

磯貝 一

はじめ

本橋端奈子

海軍志望から柔道家志望へ



磯貝一十段

磯貝一は明治4（1871）年10月26日、延岡県船倉（現在の宮崎県延岡市）の土族磯貝家に生まれた。彼は生来の虚弱体質で、病気をしている時期が無いほどであったため、親戚や近所からは「あの子は育つまい」と陰口を言われるほどであったという。父・恒久は磯貝家の養子であったが、やはり武士の出で柔・槍・剣術などを究めており、病弱な磯貝をなんとかして育て上げようとかかなり厳しいスパルタ式教育を施した。

冬でも厚着も下駄を履くことさえも許されず、裸足で遠方まで水汲みに行かされたり、冬の五箇瀬川で毎日のように寒中水泳をさせられたり、磯貝にとっては苦しく辛い体験であったようである。また体を丈夫にするため灸を大量に据えられもした。この時の灸の凄まじさは、磯貝が晩年になっても60個以上の跡が消えずに点々と体中に残っていたほどであった。しかし、この灸が効いたのか、12歳頃になるとどうやら人並みの身体になることができた。そしてさらに身体を頑強にするため、この頃から、父や延岡藩武術師範である鈴木千左衛門について柔術の修行を始めることとなる。当時磯貝が稽古をしたのは、延岡藩関口南蛮流柔術と戸塚派揚心流柔術⁴であった。

柔術を修行し、身体も鍛錬されつつあった磯貝の希望は、帝国海軍に入り軍人として身を立てることであっ

た。そのためには一刻も早く上京したいという想いに駆られていた。しかし、父の恒久が鉱山事業に手を出して失敗を重ね、その当時の磯貝家は日々の暮らしにも困るほど困窮していた。東京までの旅費を工面するのにも苦労し、磯貝が何とか縁を見つけて上京できたのは明治20（1887）年、17歳の時であった。東京

小石川区（現在の文京区）の下宿先で磯貝は、主人に頼み込み、書生としてだけでなく女中の代わりになって炊事や洗濯・買物もこなし、浮いた女中の給金で塾に通わせてもらっていた。この時通っていたのが海軍兵学校への入学者が多かった敬勝館である。そして、一日の殆どを家事に忙殺される中でも勉学に励み、海軍兵学校の受験に挑戦しつづけた。合格者800人中20人の狭き門である。1度、2度失敗を重ね、その間、格致校という有名塾に住み込み待遇で

移りもした。海軍予備校で学びもした。しかし、試行錯誤を重ねて挑んだ3度目の試験でも、残念ながら磯貝の努力が実ることは無かった。兵学校には当時20歳までという受験資格があり、既に20歳になっていた磯貝は、ここで、生涯の夢としていた海軍軍人への道を絶たれてしまったのであった。

泣くにも泣けず、悲嘆に打ちひしがれていた磯貝ではあったが、しかしその実、1つの大きな幸運を握ってもいた。それは、磯貝が寄宿していた格致校が麹町区上二番町（現在の千代田区）にあり、その格致校の隣には講道館が建っていたことである。「全く、世の中というものはおかしなものだ。」その後述懐している通り、不思議な縁に導かれるかのように、磯貝は講道館への入門を決めたのであった。明治24（1891）年10月11日のことである。

講道館で柔道に専心

男子一度志を立つ、もし成らざらんば死あるのみ¹⁰

海軍軍人から柔道家へ一度志を変えた以上、これ以上決して曲げはしない。自分の努力次第で達人になってやろう。そんな心意気で講道館に入門した磯貝ではあったが、郷里・延岡でなまじ柔術を修行した経験があったため、腕力にまかせて、かつて覚えた大外刈や背負投で先輩を投げ飛ばしては良い気になっていた。折しも嘉納治五郎師範は不在であり、横山作次郎や山下義韶らも外に稽古に出ている講道館にいない時期であったのである。しかし、「こんなものか」と鼻を高くしていた状況は一週間と続きはしなかった。先輩の湯浅松之助に見事なまでに投げられて目を覚まし、それ以降は初心者に戻った気持ちで真摯に「正しい」柔道修

行に励むことになる。

この頃の修行を、磯貝は次のように振り返っている。

入門後しばらくすると、地方に出ていた先輩達、横山・西郷・山下などという猛者連が、帰ってきて猛烈な稽古をつけてくれた。

(略) 先輩連にこういった音に聞こえた猛者が揃っている。いづれも身をもって講道館を起こし、実力でここまで叩き上げてきたチャキチャキの講道館っ子だ。第一、気組みから違う。稽古は、技や力ばかりではない、意気、気魄が大切である。同じ稽古にしてからが、こういう連中の間に入って叩いて貰っていると、気力が気力を生んで、面白いほど技が進んで行くものである。

無我夢中というのであろう。全く、稽古に没入して、他のことは目にも入らなければ、耳にも聞こ

えない。¹²

強い者の中で採まれて、自分が磨かれていく楽しさが伝わってくるようである。磯貝が柔道に没頭していた様子は、暑中稽古や寒稽古での姿からも見て取れる。暑中稽古では、流れる汗でびしょびしょになった柔道衣を、深夜まで炭火で乾かし、次の日に何とか使えるようにして稽古に励んだという。また冬、毎朝4時から始まる寒稽古において、1番に道場に飛び込んで出席簿に名前を記入することは「一番槍」と言い、当時自慢の一つとされた。磯貝は、1時間も前から門にへばりついて誰よりも早く道場に飛び込み、この一番槍を京都に派遣されるまでの2年間貫き通した。このように、柔道に専心すると決めたからには徹底した生活を送ったのであった。その稽古振りを認められ、入門半年後の明治25(1892)年5月29日には初段に、

● 講道館柔道 ビデオシリーズ

きめ 極 の 形 かた

「極の形」は、真剣勝負に極も有効な技を習得させるために作られたものです。極の形は、互いに坐った体勢で攻防する「居取」8本と、互いに立った体勢で攻防する「立合」12本の計20本で組立てられています。この形の修練によって、強健な体さばきで、最も適切な技法で相手を制圧する、理合いを体得することができ、とくに居取りでは禁止されている「当身技」を十分に稽古し、身につけることが大切です。

- 一、居取 突込 横打 横突
 - 二、立合 突込 切込 横打 横突
 - 三、立合 突込 切込 横打 横突
 - 四、立合 突込 切込 横打 横突
- 定価 六、八二五円(送料別)
 (本体価格 六、五〇〇円+税)
 ◎お申込・お問い合わせ先は
 〒112-0003 東京都文京区春日一―一六―三〇
 講道館総務部
 電話 〇三―三八―一七―一五五

また明治26（1893）年1月7日には二段に昇段することとなる。

柔道教師として京都へ赴く

二段になると同時に、磯貝は、嘉納師範から第三高等中学校（三高）¹³。京都大学の前身のひとつ）での柔道教師の話を勧められた。嘉納師範は、ある程度段の進んだ門人を地方へ派遣し、講道館柔道の普及に心を砕いていたのである。磯貝は、自分の力を師範が認めてくれたことは嬉しかったが、しかし、どうしても乗り気になれないでいたようである。その理由は、1つに自分は未だ修行中の身であり、教える立場には無いという気持ちがあったこと、また、もう1つに、「柔道に専心する」と稽古を積んではきたが、磯貝の心の隅には父の恒久が失敗した鉱山事業を、自分の手で成功させてやりたい、磯貝家を再興したいという思いがあった

ことである。磯貝はこの時期、柔道の達人になりたいとは思っていたが、柔道を自分の職業としようという気持ちは未だ無かったことが窺える。だが、師範に押し切られる形で、磯貝は京都に向かうこととなったのである。明治26年4月、23歳のこと

京都においても、磯貝はどうしても前向きになれずにいた。そんな磯貝に、師範から1通の書簡が届く。そこには、柔道の「宣教師」になったつもりで、どうか道のために尽して京都で頑張って欲しい、という師範の願いが懇々と綴られていたのであった。この書簡に感銘を受けた磯貝は、柔道の為に、他の全てを捨て己を尽そうと誓い、師範から譲り受けた白袴を宝物に、京都での柔道普及に努めていくこととなる。その誓い通り、磯貝はこれより後京都に根を下ろし、二度と東京へ戻ることは

無かった。

京都では、三高の他に文学寮中等部（後の平安中学校）や真宗第一中學寮（後の大谷中学校）、師範学校、同志社などでも柔道の教授にあたり、磯貝は講道館の名を少しずつではあるが、着実に広めていくこととなる。そして翌27（1894）年8月には三段へと昇段を果すのであった。



師範からもらった宝物の白袴を着用する磯貝(右から2番目)

大日本武徳会

明治28（1895）年4月、京都において、「武道を奨励し、武徳を涵養し、国民の士気を振作すること」¹⁷

を目的として、小松宮彰仁親王^{あきひと}を総裁に仰ぎ、全国・各種武道を網羅する大日本武徳会が設立された。京都で講道館柔道の普及に努めていた磯貝は、必然的にこの武徳会に深く関わっていくこととなるのである。

武徳会と磯貝の関係は、こんな壮絶な逸話から始まる。明治28年10月、武徳会設立を記念して、第1回演武大会が開かれ、磯貝は横山作次郎らと共に、柔道の形を演じることになった。しかし困ったことに会場が狭く、剣道場と柔道場のスペースを同時に取るが出来ない。総裁である小松宮親王がいらしている前で、途中で畳を並べたりなどの準備は出来るわけもない。役員一同蒼白になり困り果てていると、「鬼横山」の異名を持つ横山作次郎が、「磯貝君、柔道は畳の上だけと決められたものじゃあるまい。どうだ、ひとつ板の間でやってみようじゃないか」と提案し、

急遽板の間での形披露と相成ったのであった。この時演じたのが古式の形と投の形である。渾身の力をこめてお互い猛烈に投げ合うが、板の間の所々にでている釘で、投げられる度に手足から血が滴り、会場は異様な雰囲気包まれた。列席者は悲壮の感に打たれて、言葉もなく、総裁親王も気の毒だったとおっしゃられたと言う。この功により、磯貝や横山らは武徳会第1回精錬証を受証したのであった。

この頃の京都以西地方は、磯貝の述懐によると、柔術は制剛照心流・起倒流・戸塚派揚心流・天神真揚流・不遷流などがそれぞれ道場を持ち、相当羽振りを利かせている状態であったという。講道館は関西ではまだ新入りの類で、武徳会の道場でもそれから各流派が入り乱れて稽古をしており、どの流派が武徳会の主流になるのか、大いに注目を集めていた。そ

んな中、教育界からは柔術各派よりも「道」を説く講道館を武徳会の主流に推す声が強く、明治32（1899）年、武徳会最初の正式な柔道教授が四段に昇段していた磯貝に決定したのであった。しかし、やはり柔術各派からは反発が強く、特に講道館柔道は寝技が弱いから、と懸念する声が多かったようである。磯貝は寝技について次のように振り返っている。

（不遷流の）田辺又衛門は逆が得意であったが、それも今の様な手ぬるいものでなく、足でも手で何でも、逆をとってしまおうという凄いいのだったし、（起倒流の）今井行太郎は横四方固、（双水流の）青柳喜平、（起倒流の）大島彦三郎らも抑込みに卓越していた。こんな具合だから、立技では相当やれた講道館柔道も寝技となると、さっぱり具合が悪い。しかし、試

合ともなればこの二つが並び立たなければいかん。従って稽古では、誰一人として講道館柔道を、云々するものはなかったが、いざ試合となると、その成績からして、兎角の評をなすものが出て来た。(略) より以上の優勢をもって、

他流の寝技に対しなければ、講道館柔道の名誉に関するとともに、ここまでして貰った後援者に相済まぬ。いかに声を大にして講道館柔道の特徴、美点を論じようとも、畢竟試合に勝たねば弱者の悲鳴としかとられない当時の情勢であった。どうしても、講道館の寝技を完成せねばならぬ。他流他派を厭倒し去るが如き威力ある寝技を削り出さねば―という辛苦が、遂に講道館流寝技研究の発端となり、これが完成への精進となった。演武大会に上洛する永岡(秀一)佐村(嘉一郎)等、講道館の錚々と

ともに、毎年三高の道場に閉じ籠り、戸を締切って、終日寝技の研究に没頭したのも、そのころの苦しい思い出だ。²¹⁾

必死の努力を重ね、関西における講道館柔道の存続のため、年々寝技の技術を磨いていっ

た様子が見て取れよう。こうした研鑽を積んでいることを師範もよく知っていたようで、ある年、磯貝が講道館の暑中稽古のために上京した際、師範が「君も京都へ行って大分寝技がいけるようになったそうだが、どうだひとつ、私を抑えてみんか」と言ってきたことがあった。そこで磯貝は師範を左袈裟に固めると、師範は跳ね上がっておきようとし、その拍子に磯貝の肋骨が折れてしまったのである。お互いハッとしたが、お互いが顔に出さず、磯貝はどうとう水をかぶって我慢し通して治してしまったのであった。

●講道館柔道

ビデオシリーズ 第九作

古式の形

古式の形は、嘉納治五郎師範が柔道創成道を開始される以前に学ばれた柔術・起倒流の形です。古式の形は、往時の武士が戦場で甲冑を身に付けた闘争の投技を主としたもので、表の形14本、裏の形7本から組み立てられています。

〈内 巻〉

●嘉納治五郎師範と山下義徳十段による古式の形

●古式の形 実技(差し)

●始めの動作(礼法)

●表の形14本と裏の形7本をスローモーションなどをまじえて実技の要点を詳しく解説する。

●講道式での古式の形(まとめ)

定価 六、八二五円(送料別)
(本体価格 六、五〇〇円十税)

◎お申込みおよびお問い合わせ先

〒112-0003 東京都文京区春日一―六―三〇
講道館総務部
電話 〇三―三八―一七―一五五

それにしても、寝技を得意とする柔術と講道館との対決はどうしても避けられないものとなっていた。その最たるものは、明治33（1900）年、第5回武徳祭演武大会での不遷流田辺又衛門との一戦であった。磯貝は、田辺を目標に寝技の研究に励んでいたの、従ってこの達人田辺を倒すことは、講道館柔道が他流の柔術を完全に征服することになる、と考えていたようである。最初から寝てくる田辺に対し、磯貝も決死の思いで相手の得意技・寝技に飛び込んでいった。そして攻めに攻めて、とうとう引き分けにまで持ち込んだのであった。この引き分けにより、講道館は立技もいけるが寝技もいけるという評価を勝ち取ることが出来たのであった。²²そして明治34（1901）年8月には五段に昇段し、また明治37（1904）年8月には、京都武徳会に来ていた嘉納師範に、

永岡秀一と古式の形を演じて見せ、形の熟達が見められてその場で六段への昇段を許されることとなった。こういった力量を買われ、磯貝は、

武徳会が明治38（1905）年に設立した武術教員養成所（後の武道専門学校。以下、武専）の柔道教師をも勤めることになる。武道の教員たるもの、力や技だけでなく学識や人格をも兼ね備えた、つまり武徳に優れていなければならない、という要望で作られた専門学校である。相当稽古は激しく、生徒らも全力を傾けて磯貝に臨んできた。磯貝もまた火の出るような稽古でそれに応えた。磯貝の指導法は次に述べるような「年中不休主義」「率先主義」と自ら称するものであった。

私は口不調法で無口ですから、説明を巧にするという事はどうも出来ない、しかし何でもかんでも、自ら率先して範を示し、それで説

明に代えるという流儀です。寒稽古の時でも、他の人々よりは早く行って、そして休まないというやり方です。²³

このように、自らが手本を示すことで、厳しいながらも良い師弟関係を築いており、磯貝の自宅には門人が10数人も書生として住み込んで大変賑やかであった。²⁴酒が好きで、門人らでよく酒宴を開き、そういった席ではよく三味線に合わせ柔の形を演じたりもしたが、²⁵実によく合って素晴らしかったという。また、嘉納師範を尊敬し、師範の柔道を正しく伝えようとする意識が非常に高く、常に「嘉納師範の御説はこうであるから、お前たちもこうするように」という教え方を採った。ある時などは、「師範に『磯貝に六段の証書を渡したのは私の誤りであった』と、六段証書を破かれる夢を見た」とのこと、師範の肖像の前で正座して

自分の至らなさを詫びし、今後益々柔道に精進することを誓っている様子が門人に目撃されたこともあったという。こうして磯貝は武専において、岡野好太郎・金光彌一兵衛・天野品市・道上伯など、錚々たる猛者を次々と育て上げていったのであった。

また、師範らとともに武徳会の形制定にも大きく貢献し、明治45（1912）年1月には七段に昇段している。翌大正2（1913）年には武徳会から柔道範士の称号を贈られ、同9（1920）年3月、更に八段へと昇段を果したのであった。

天覧試合と十段位

続く昭和5（1930）年4月、磯貝は、山下義韶・永岡秀一とともに講道館初の九段に列せられる。これは、師範が「形の出来ることは勿論、柔道の理論もよくのみこみ、又、単に武術とか体育とかいう立場では



昭和8年宮崎丸にて師範と最後の2ショット

なく、広い意味の柔道の精神をよく体しておいて、これを自分の身に行使得る（略）人格品性が相当の者」と認め、許されたものであった。

昭和9（1934）年5月には、皇太子殿下の御誕生を記念して天覧試合が華々しく催された。このとき、「名人」と言われる柔道家たちの乱取を是非お目にかけようという案が

持ち上がり、磯貝と永岡の乱取が組まれることになった。永岡は59歳、磯貝は既に64歳であったが、生涯最後の試合、と気合を込めて力を尽した。鋭い技の応酬となり、九段の名にふさわしい名試合であったという。また、昭和15（1940）年紀元2600年記念の天覧武道大会に際しても、永岡の取、磯貝の受で古式の形を演じた。この2つの天覧は、一家一門の光栄として磯貝生涯の誉れであったようである。

ここにおいて、長年に亘る関西での柔道普及の功が顕著なことを評価され、磯貝は昭和12（1937）年12月22日、50年来の友である永岡秀一と共に十段位を授与されることになった。現役で後進の指導にあたっては、柔道家として初の荣誉である。嘉納師範を理想として50年柔道修行に励んできた磯貝にとって、師範に認められ段位を授かることに勝る喜

びは無いであろう。磯貝は、師範そして柔道から受けた恩義に報いるため、体の続く限り斃れるまで柔道に尽そう、と想いを新たにしたり、と後に語っている。しかし、磯貝が手塩にかけた大日本武徳会と武専は、まもなく勃発した第二次世界大戦の混乱の中、政府の外郭団体、民間団体と姿を変えることを余儀なくされる。そして昭和21（1946）年11月、GHQによりとうとう武徳会は解散を命じられたのであった。武徳会の解散によって下部組織であった武専も当然閉校となってしまった。この解散を見て、磯貝は自分の役目は既に終わったと感じ、柔道界からの引退を決意したのであった。²⁹そして、翌22（1947）年4月19日、京都市左京区の、閉校となった武専の向かいにある自宅において、静かに、眠るように息を引き取ったという。磯貝が大事に育ててきた菊と朝顔の

鉢が数百、庭に座敷に並んでいる中での臨終であった。享年77歳。

磯貝は生前、柔道を1枚の白い紙に喻えることが多かったという。磯貝の柔道観を垣間見る一助としてここに紹介し、この稿を終わりたい。

（磯貝は）背は高くないが、まるで巨巖が据えられたようにふさわしくドッシリとしている。1000名に余る生徒は、圧倒されたようにヒソヒソ声も聞こえぬ。シーンとなっている。「柔道は…」と先生がいいながら懐中から一枚の白紙をとり出した。（略）いきなりそれを両手でくしゃくしゃに揉んだ。揉み終わったと思うと、今度はそれを拵げて伸ばしながら「柔道はこの通りである」といった。サアわからぬ。狐につままれたようにポカンとしていると、それから一大先生はおもむろに順々（はじめ）と説かれた。「柔道というものは、

この白紙を手で揉んだように、身を粉にして稽古しなければならん。そしてその結果又もとの白紙のようにシワ一つないようにならねばいけない」ということであった。³⁰

（図書資料部）

※引用文献は、現代漢字・仮名づかいに改めた。

《主要参考文献》

『柔道範士磯貝一口述 わが七十年を語る』

長谷川泰一著 赤心同盟会東海支部 昭和15

年

『柔道界の関西都督磯貝七段』水谷竹紫著

『柔道』2巻9号（大正5年9月号）

《その他典拠・註》

1 明治4年に廃藩置県が実施され、またその後何度か府県の統合再編が行われている。そのため延岡県は、磯貝が生まれた1ヵ月後の11月には美々津県、明治6年には宮崎県、明治9年には鹿児島県に再編という経緯をたどり、明治16年再び宮崎県となった。

2 延岡藩関口南蛮流柔術、同藩神清流槍術、

- 同藩無敵流剣術をそれぞれ究めた。
- 3 「父・磯貝一を語る」 磯貝武雄著 『柔道』 43巻11号(昭和47年11月)
- 4 鈴木千左衛門が、藩から派遣されて千葉へ戸塚派揚心流柔術を修めるために留学していた経験があるため。当時、藩命で他藩へ武術修行のために派遣されることは一般的であった。磯貝の父・恒久も、かねてから念願であった揚心流修行に派遣されることが決定したが、直後に鹿藩置県が行われ、延岡藩自体が消滅してしまったため、「本場」で揚心流を学ぶことは出来なかった。
- 5 明治24年、格致校は靖獻書院と改称し、英漢教の塾から漢学専門の塾になった。
- 6 この海軍予備校で磯貝と同級生であったのが飯塚国三郎十段である。
- 7 前掲註3には、海軍兵学校不合格の理由は身長が足りなかったためだとある。
- 8 一時は本郷真砂町に本館があり、上二番町道場は分場扱いであったが、この頃にはまた合併し上二番町道場が講道館本館であった。
- 9 『柔道範士磯貝一口述 わが七十年を語る』 長谷川泰一著 赤心同盟会東海支部 昭和15年
- 10 前掲註9参照
- 11 日露戦争における旅順港閉塞作戦にて戦死し柔道殿堂に顕彰されている湯浅竹次郎の兄
- 12 前掲註9参照
- 13 明治27年に第三高等学校に昇格した。
- 14 「攻撃精神と私の修行時代」 磯貝一 『柔道』 15巻2号(昭和19年2月)
- 15 前掲註14参照
- 16 「講道館彙報」『國士』第6号(明治32年3月)
- 17 「大日本武徳会設立趣旨」『柔道百年』老松信一著 時事通信社 昭和41年
- 18 当時五段。講道館四天王の1人。
- 19 武徳殿はまだ出来ていないため、京都第4回博覧会の跡地を使用していた。
- 20 昭和15年当時
- 21 前掲註9参照
- 22 磯貝と田辺はこれ以降、磯貝が田辺の娘に縁談を紹介するなど、良い友人関係を築いたようである。
- 23 「柔道界の関西都督磯貝七段」水谷竹紫著 『柔道』 2巻9号(大正5年9月号)
- 24 前掲註3参照
- 25 「柔道よもやま座談会」『柔道』 9巻1号

(昭和23年1月) 曲目は「春雨」だったという。この頃流行だったようで、山下義韶などもよく演じていたようである。

26 「帰一齋漫話」『柔道』 1巻2号(昭和4年5月)

27 「皇太子殿下御生誕奉祝武道大会柔道陪観記録」『柔道』 5巻6号(昭和9年6月)には、二人の乱取の様子が詳細に記録されている。

28 「武専 その発足から解散まで」『近代柔道』 2巻3号(昭和55年3月)

29 前掲註3参照

30 「磯貝先生と私」工藤一三著 柔道新聞139号(昭和32年2月10日)

柔道ルネッサンス・キャッチフレーズ

支え合う仲間がいるから頑張れる

(浦津 明弘・熊本県)

IPPON! く心と努力で決める技

(上方 恵理・岩手県)